千葉大学大学院人文社会科学研究科　研究プロジェクト報告書　第 203 集
『哲学的自然主義の諸相の展開』（2011 年）33-43

ムーア自身にとってのムーアのパラドクス

川口　嘉奈子

0　ムーアのパラドクスについて

ムーアのパラドクスは、ある特定の形式をもつ一人称信念発話の発話不可能性に関するパラドクスである[1]。ムーアのパラドクスをめぐる議論は、20世紀の中頃から今に至るまで続けられていて[2]、古典的な問題の一つであると言える。ムーアのパラドクスの現れる文（以降、ムーア文）は一般に発話不可能な文であると言われるが、「発話不可能」とはいかなる意味で発話不可能であるかをまず説明しなければならない。われわれの日常会話においては、状況を選ぶとはいえ、実にいい加減な表現を用いても意思伝達に成功するケースがそれなりにある。このことから、人間が発話をした時に（そもそもそれが「発話」である限り）本質的に意味をなさない文など存在しないと言うこともできるだろう。ムーア文は、その文によって表現される意味をもつ発話であるように思われるにもかかわらず、端的に発話不可能であると言われる。その意味するところは、おそらく解釈の際に発話主体の信念が不合理になるということである。ただし、ムーア文の奇妙さの原因はそれだけではないだろう。

およそ半世紀に渡りパラドクスの解消に向けた多種多様な議論が展開されてきて、ムーアのパラドクスがもつ奇妙さは二言三言で説明し尽せるほど単純なものではないことが明らかになった。それは、高階の信念、一人称の特権的性質と自己知、信念改訂論理やアクラシアなど、主に一人称信念に関する哲学的諸概念と結びついているためだと考えられる。これらの概念は、論者によって解釈にばらつきがあるので、パラドクス解明のための道具立てとして一義的に

1　ムーアのパラドクスは、主語が一人称単数形で、現在時制、直説法の形式を併せもつ連言の発話文に現れるパラドクスである。そしてその発話文は、連言肢の一方が事実描写、もう一方がその事実に対する話者の否定的な信念で構成される。ムーアの提示した「p だが私は p と信じない」(p&～Bip)型と、主にウィトゲンシュタインが使用した「p だが私は p でないと信じる」(p&Bi～p)型の二種類が有名である。どちらにせよ一般的な理解では、ムーア文の内容と一致する心的状態であることは可能でも、ムーア文の発話はできないとされる。

2　現在では D. Rosenthal や J. N. Williams らを中心に研究が進められており、2008 年にはムーアのパラドクスに関する初めての論文集が刊行された。(Green, M. and Williams, J. N. (ed.), *Moore's Paradox: New Esseys on Belief, Rationality, and the First Person*, Oxford University Press, 2008.)

はたらいていない。したがって、ムーアのパラドクスの奇妙さを分析するにあたっては、道具としてはたらく諸概念が各論者にどのように理解され、使用されているかを分析する必要もある。

こうした問題の解決に取り組むことを目的として、本論文はその中でも、ムーア自身によるムーアのパラドクスに関する記述とパラドクスの解消方法をまとめたものである。本論の主要な論点は、ムーアの著作において二種類の“imply”が存在するという指摘である。そして、それぞれは異なる概念であるが、どちらも発話の解釈の際に前提される「慣習」[3]的なものであるという点で共通している。解釈に慣習が必要かどうかについての議論はさておき、慣習的なものとしての“imply”概念の理解は、オースティン、あるいはサールらによる言語行為論の萌芽であると考えられる。ただし、本論の主張が正しければ、ムーアのパラドクスは「慣習」によって言語的なパラドクスになるという（オースティン=サール流の）考え方は、ムーアのパラドクスの本質を捉えきれないように思われる。

1　ムーアのパラドクスの登場

はじめに典型的なムーア文を示す。

(1) “I went to the pictures last Tuesday but I don't believe that I did”.[4]
（「私は前の火曜に映画に行ったが、自分がそうしたとは信じていない。」）

1942年の論文“A Reply to My Critics”の第1章において、ムーアは(1)の文にある種の「不合理性(absurdity)」が潜んでいると指摘した。その後、ウィトゲンシュタインが『哲学探究』や『心理学の哲学』、ムーアとの往復書簡において、(1)および(1)に類似の形式をもつ文に繰り返し言及したことで、哲学的に意義深いトピックとして認知されるようになった。ウィトゲンシュタインは、ムーアの

[3] 「慣習」という語にはさまざまな意味があるが、ここでは規約や規則のような強い意味ではなく、社会的な実践によって生じたゆるやかな決まり、話者と聞き手に予め共有され、双方にとって利用可能なルール、あるいは経験的に特定の場面で採用されがちな傾向のような必然的でないものを広く指す語として使用している。

[4] G. E. Moore, “*A Reply to My Critics*”, p. 543.

なした数々の哲学的業績の中でこのパラドクスを発見したことが最大の仕事であるという評価を下しており[5]、(1)の文に見られる不合理性を「ムーアのパラドクス(Moore's Paradox)」と呼んだ[6]。

2　ムーアの二つの「含意(imply)」

2.1　含意1

ムーアのパラドクスに対する考察は、“A Reply to My Critics”を発表するより40年も前の著作*Principia Ethica*の中ですでに開始されているように見受けられる。ムーアは自らの研究において、ムーア文やムーアのパラドクスの不合理性の解明を最大の目的としていたわけではない。真であることとはどのようなことか、道徳的判断の客観性はどのようにすれば得られるかといったより広範な哲学的課題を追求する過程で、「真である」という概念を軸に、事実、命題的態度、主張の間の関係を指摘した。以下がその箇所である。

> 私は真であるものを、私がそう考えるものからいつも区別しえない、ということがしばしば指摘されており、このことは真である。しかし、私は真であるところのものを、私が真であると考えるところのものから区別しえないけれども、私は、それが真であるということと言って意味するものを、私が真であると考えているということと言って意味するものから区別することは、いつでもできるのである。…（中略）それが真であるという主張は、私がそれを真であると考えている、という主張を含んですらいない。（深谷昭三訳『倫理学原理』p. 173）

ここに(1)のような具体的な文例は出ていない。しかしこの箇所では、ムーア文の奇妙さの源の一つと考えられる一人称信念と一人称発話の関係の指摘がなされている。引用箇所によると、ある事実pを真であると思うことと、実際にpが真であることは、主体の内部では内容的に区別できないとされる。仮にpの内容が《1+1=2である》だとすると、一人称信念主体が1+1=2を真であると思うことと、1+1=2が実際に真であることは区別できない。これは、信念の「真理を

5　ノーマン・マーコム,他,『放浪—回想のヴィトゲンシュタイン』,藤本隆志訳, p. 111
6　『哲学探求』第 2 部第 10 節に初めてこの名称が出てくる。

狙う」性質[7]によるものである。その一方で、そのそれぞれが発話されると、話者が1+1=2を真であると考えていることと、1+1=2が事実真であることは異なる主張になる。心の中では二つの文の内容が区別できないのに、主張した途端にそれらの表す内容が複数考えられるようになるのはなぜか。これはまさしくムーアのパラドクスの問題の核心である。ムーアは主張と一人称信念に関するこの特殊な現象を説明しようと、1912年の著作*Ethics*において「含意(imply)」という概念を導入した[8]。

> われわれがたとえいかなる主張をするにせよ（われわれが語っていることを意味していないのでなければ[unless we do not mean what we say：われわれが自分の言葉を本気で語っていないというのでもなければ]）、そのときにはいつでもわれわれは常に二つの事柄のいずれか――すなわち、われわれが当の事柄をそうであると思っているということか、それとも私はその事柄がそうであると知っているということかの、いずれかを表明しているのである。…（中略）そして私が、私の語っていることを意味しない場合ですら[even where I do not mean what I say：私が自分の言葉を本気で語っていない場合でさえ]、私の言葉には、私が A は B であると思っているということか、または私がそれを知っているということかの、いずれかを含意すると言われてよいのである。（深谷昭三訳『倫理学』pp. 95-96 傍点は訳者に、[]内は引用者による）

Ethics における「含意」の説明は以下の通りである。話者は、彼/彼女自身がいずれかの信念状態をもつことを発話行為によって表明することができる。また、文の発話は表現された命題内容を字義通りに伝達しながら、表現された内容と同じ内容の信念を発話者がもつ、つまり p という信念が発話者 a に帰属させられる関係を前提する[9]と考えられているように見える。発話「p」には含意

---

7 信念と他の命題的態度を明確に区別できる特性として、ある信念が真であることはその信念をもつ信念主体と独立の問題ではなく、信念主体は自らの信念を常に真であると思っているという性質を挙げる論者がいる。たとえば、T. クレインがこの性質を「真理を狙う」と表現している。邦訳『心の哲学−心を形づくるもの』p. 157 を参照のこと。

8 T. Boldwin らが指摘するように、ムーアは話者に imply される経験的で一般的な慣習の違反により不合理性が生じると述べているが、どのような信念が imply され、それがどのように imply されるか、パラドクシカルな言明に表れる不合理性を imply された信念がどのように説明するか、等を明らかにしていない。詳しくは T. Boldwin, *G. E. Moore*, pp. 227-228 を参照のこと。

9 発話行為とムーア文の関係については本論で詳しく述べるスペースがないため割愛する。

Bap が付随するのである。その一方で、たとえばわれわれの「p」という主張に際し、文発話時の話者の信念状態は次の二通りが考えられる。①「p」の内容がまさにその通りだと思っている（知っている）ケース、②「p」と言いながら本心から p とは思っていないケースである。

上述の①と②のケースについて、①のケースは a の主張「p」によって Bap か Kap であること[10]を a が自然に表明している場面に沿う。しかし、②のケースにおいて「p」を発話した場合にも Bap が含意されると述べられる点は、一見するとやはり特殊であるように思われる。含意によって「p」発話時の a の信念状態が Bap であるとされるならば、その前提の不自然さに疑問が生じるだろう。なぜなら②のケースは、話者が思ってもいないことを発言する（あるいは嘘の発言をしている）典型的なケースだからである。このとき話者は、「p」と発話しながらも本当は p でないと考えているのだから、話者 a に帰属させられる信念状態は～BaP でなければならない。聞き手が話者 a の発言を解釈するとき、①、②のケースの存在によって、聞き手は少なくとも次の二つの解釈の間で逡巡することになる。a の「p」という発話に対し、ほんとうに p であると a が考えている（「p」は a の信念の表明であり Bap も自然に含意される）か、「p」と言いながらも a は実は p とは思っていない（Bap は含意されるにすぎない）かである。しかし、ムーアの含意に言及しても、p が a の真意だったのか、あるいはそのような信念が含意されるにすぎなかったのかを聞き手は区別できるようにはならない。含意概念の分析は、話者が本心を言っているかどうかは聞き手には判らないという問題の解決に寄与しない。

ムーアの「含意」はこうして、発話が解釈される際に前提となる慣習的なものの中の一つとして理解できそうである。そして、今のところそれは話者の信念帰属を明らかにするようなものではない。次に、たとえ話者が嘘をついていても発話したその時点の含意は成立する[11]という点に着目し、発話に含意される信念状態と話者のほんとうの信念との関係について、ムーアによる説明をもう少し見ることにしよう。

> たとえば、「前の火曜に私は映画に行った。」と特定の日に私が主張するならば、これを主張することで、発話した時点で私がそうしたと信じる/

この箇所は発話に関する一般論の一つの可能性として受け取ってもらいたい。

[10] 発話が Kap（p であることを知っている）を含意するという論点は、本論において中心的なものではないため、以下の箇所においても省略する。

[11] 『倫理学』の引用箇所以外に、“A Reply to My Critics”においてもそうである。

知っているということを、言っていないにもかかわらず、含意する。しかしこの事態において、私が含意するこのことは私が主張したことの部分ではない。というのも、もしそうだったとしたら、私が例の火曜日に映画に本当に行ったかどうかをはっきりさせるために、私がそうしたと言ったとき人は私がそうしたと信じている/知っているかどうかをはっきりさせる必要があることになってしまうので、そのような事態が存在しないことは極めて明瞭である。また、私が前の火曜に映画に行ったと信じている/知っていると私が言った時に、私が言ったことから映画に行ったことが出てこないのも明らかである。すなわち、私が映画に行った事態があって、なおかつ、私がそのことを話したときに私がそうしたと信じているか知っているかのどちらでもないことがありうる。（拙訳 “A Reply to My Critics” p. 541 括弧内は引用者による補足）

前の火曜日に映画に行ったという事実があったとして、「前の火曜日に私は映画に行った。」という発話を「q」とする。「q」に含意される Baq は「q」の部分ではなく、Baq から「q」も出てこないという二つの主張は自然である。また、「q」によって Baq が含意されても、そこからは a がほんとうに p と信じている/知っていることが必ずしも導出されないというムーアの説明は、嘘つきが「q」と言った時に Baq を含意しながら、かつその信念状態が Baq ではない事態があることを示している。

つまり、ムーアによってここで想定されている事態は、発話に含意される話者の信念と、話者の信念集合の中に含まれるほんとうの信念が無関係ということであろう。嘘つきが「q」と発話するとき Baq が含意されるが、彼/彼女は嘘つきであるがゆえに信念集合に～q を含まねばならない（信念状態は Ba～p である）。このときもし、q が話者の信念集合に含まれることになるならば、嘘つきの信念集合は矛盾を抱えることになり、それはおそらく受け入れられないだろう。このように考えると、含意によって形成される信念が話者の信念集合の中に含まれることを措定するわけではないという意味で、ムーアの含意は少なくとも話者の信念状態について述べているものではないことになる。それゆえ、嘘つきの発話にも自動的に適用できる。結局のところムーアの含意は、誠実な発話者に限らず、文「p」のどのような話者 a についても Bap であるはずだという前提のもとで聞き手が解釈をスタートさせるべき、という、発話の場面

における聞き手の側の慣習[12]の一つとして理解することが適切であるように思われる。

2.2　含意 2

ムーアによる含意の説明がまだ他にも残されている。以下の部分は“Russell’s Theory of Descriptions”からの引用である。

> フランス国王である人が少なくとも一人いることをZ（命題の表現‘フランス国王である人が少なくとも一人いる’）が意味しないかもしれないことは、熟考すればこれも明らかである。・・・（中略）
>
> 簡単に言えば、仮定されたケースにおいて、まさにその命題が真であったとして、その命題は「フランス国王である人が少なくとも一人いる、ということをZは意味していない」によって正確に表現されているだろうが、その統語論とこれらの語の群の実際の用法を考えれば、その命題は偽である。しかし、もしこの命題が真であったとするなら、決して自己矛盾的にならない仮定が一つの事例になることになり、これは自己矛盾的であるはずがない。・・・（中略）
>
> しかしこれら二つの命題のうち最初のものが、偽ではあっても自己矛盾ではないと思われるが、私が使っているまさにその語の群（「フランス国王である人が少なくとも一人いる、ということをZは意味していない」）によって表現していることの中に特別な不合理性が内蔵されていることが認められなければならない。われわれが発話をなすために表現を使うとき、表現を使うというささいな事実によって、われわれが確立された使用にしたがってそれらを使っていることを含意するという事実から、私が意味するその不合理性が生じる。だから、われわれが「フランス国王である人が少なくとも一人いる、ということをZは意味していない」と万一言うとしたら、その内容を意味するためにZを使っているということを意味するために、Zが適切に使われうる状況があることを含意することになってしまう

[12] ここでの「慣習」は、聞き手と話し手の間ではじめて意味をもつ何かを指している。文法規則や単語の標準的な意味といった規約的なものというニュアンスはここでも込められていない。

（が実際にはそんなことはない）。そして、われわれが含意するこのことは、もちろん、われわれが発話している内容と矛盾する。…（中略）こうした言葉の使用によって言明をなすことは、「私は彼が出掛けたと信じているが、彼は出掛けていなかった。」のような発言が不合理であるのと同じ理由で、まったく不合理なのである。この文は不合理であるけれども、自己矛盾的ではない。そして真であるだろうと考えられる。しかし、「彼は出掛けていなかった」と言うことによって、われわれは彼が出掛けていたとは信じていないことを含意するので、われわれがこの文を発言しなくても、また、われわれが発言した文にその表現が出てこなくても、不合理なのである。（拙訳 “Russell’s Theory of Descriptions” pp. 172-173　括弧内の補足は引用者による挿入）

ここでは、

(KOF)「フランス国王である人が少なくとも一人いる、ということを‘フランス国王である人が少なくとも一人いる’は意味していない。」

という発話文を用いて含意が説明されている。(KOF)はラッセルが恒偽であるとした指示対象を欠く記述「フランス国王である人が少なくとも一人いる」をpとし、その内容をもつ命題の表現Z［フランス国王である人が少なくとも一人いる］がpの内容を意味していない、とする発話である。そして、(KOF)の文の形式を一般化すると「[p] はpを意味しない」となる。

“Russell’s Theory of Descriptions”のこの箇所で述べられている含意は、*Ethics*で導入された含意とは種類が異なる。ただし、言語を使用して何かを伝達する際にわれわれが（つまり話者と聞き手が）前提する慣習的なもの、という意味において、*Ethics*の含意と同種のものであると考えられる。たとえば、空が青いと知覚していることを誰かに伝達しようとするとき、もっとも簡単に思われる方法は、《空が青い》とその人に向かって発言することである。それにより、聞き手の中にその内容の信念が実現することを期待する。一般的な意思伝達の場面において、一連の単語の羅列「空・が・青い」と、それらが直接示す内容《空が青いこと》の関係はある程度保証されていないと困るだろう。それゆえ、(KOF)のように伝達しようとする内容が問題含みのケースであっても、その内容と直接表現Zには最低限の対応関係が成立しているはずである。ところが

(KOF)全体が表す内容はまさに、表現と内容の基本的な対応関係を否定する内容になっている。ムーアは、(KOF)の内容が表現と内容の対応関係を否定することを理由に(KOF)は偽であるとしている。その一方で、文の内容と表現がある程度対応しているという前提が常に成り立つとは限らないことを示す際には(KOF)を発話せざるを得ず、その場合には(KOF)の表す内容は真になるとしている。つまり、ムーアの含意には二種類ある。一つは、発話者aが「p」と発話するならば、発話者の信念状態がBapであるということを聞き手は措定するべきである、という解釈のための慣習である。もう一つは、通常の場合、内容pは表現「p」によって表されうるし、表現「p」は内容pを表しているだろうという内容と表現の基礎的な対応関係である[13]。そして、これら二つの含意によって、(KOF)と次の(2)は同種の不合理性をもつとされる。

(2) “I believe that he has gone out, but he has not”. [14]
（「私は彼が出掛けたと信じているが、彼は出掛けていなかった。」）

(2)は(1)とは形式が多少異なっているものの、ムーア文の一例として用いられている[15]。二文を比較すると、(KOF)は①文の内容とその表現の対応関係（含意2）に違反していて、②文の表す内容は真でありえ、③自己矛盾的でない。(2)は①発話の解釈における聞き手の慣習（含意1）がうまく機能しない文であり、②文の表す内容は真でありえ、③自己矛盾的でない。したがって、本論の二つの含意の理解が正しいとすると、解釈の場面に立つ人々が守るはずの慣習に違反するがゆえに、どちらのムーア文も不合理であることになる。ムーア自身によって慣習という語こそ用いられてはいないが、以上のような仕方で、解釈における慣習的なものを発話理解の枠組みとして用いる手法として見る限り、オースティン=サールらによる言語行為論の先駆であるように思われる[16]。

---

[13] ただし、ムーアはこの関係についてこれ以上の説明をしていない。言語表現とそれらがもつ意味との対応関係について、どういった立場にコミットしていたかは明確にされていない。

[14] G. E. Moore (1944), p. 173.

[15] この形のムーア文は、Bip&～p 型であり、脚注 1 で紹介した典型的なムーア文の形式から外れている。もちろん、～p を p に代入すれば Bi～p&p 型になるため、ウィトゲンシュタイン型に分類することもできる。

[16] 発話理解に際し、発話のもつ意味は話し手の意図によって決まるとするグライスの立場と、慣習によって決まるとするオースティン=サールの立場が存在する。発話に用いられる言語の意味に関しては、規約や慣習によって標準的な意味が決まるとするダメットと、言語に慣習的なものなど存在せず、コミュニケーションの場面でその都度生まれる聞き手と話し手の間の理解の一致こそが意味であるとするデイヴィドソンの対立がよく知られてい

3　まとめ

2.1節、および2.2節で紹介したムーアの議論において、ムーア文の発話者は、「含意」と呼ばれる二種類の慣習に違反しているとされた。つまり、ムーアのパラドクスの原因は言語に関するわれわれの慣習からの逸脱で、これにより実質的な不合理が惹き起こされることになる[17]。ムーアがパラドクスの説明に用いた「含意」概念は、発話の場面で前提されると考えられる二つの慣習的規則であった。しかし、ムーア自身による概念分析も不十分で、あらゆる発話の場面に適用できる一般的な法則として昇華されてはいなかった。また、含意概念を用いたパラドクスの分析は、話者や聞き手の信念や信念帰属の仕方に関わる自己の内的な問題ではなく、発話理解というある意味外的な要因に焦点を当てて不合理性の源を特定しようとするものであった。だが、信念そのものがもつ特定の性質がムーア文の問題に関係していることは、ムーアの説明とは裏腹に、『倫理学原理』において彼が信念と発話の関係をはじめて指摘した箇所からも明らかである。

ムーアのパラドクスの問題は、人がある事実を認識しながらも実際にはそうではないかもしれないと思う現象、つまり、自己信念に関するある種の疑いや余地の存在に関係しているように思われる。しかし、ムーア文が奇妙である、あるいは発話不可能と言われるよくある理由は、ムーア文が有意味に発言できないことである。これらの見解は、パラドクスの原因を形而上学的なものと考えるか、あるいは言語的なものと考えるかという点で大きく異なっている。ここではその詳細を述べることは差し控えるが、筆者は前者の立場、すなわち、人間の心的活動におけるこの種の懐疑が有意味に存在するという立場を取っている。よって、ムーアのパラドクスの原因は、発話の規則や慣習に類する言語的なものではなく（少なくともそれのみに由来するものではなく）別種の本質

る。

[17] ヒンティッカは *Knowledge and Belief* (1962)において、ムーアの imply を用いた説明から導出されるパラドクスの原因は「故意の嘘の不条理性」であると述べた。その上でヒンティッカは、ムーアのパラドクスの奇妙さは、嘘をつくことが例外的であるというような話ではないとブラックの言及を引用しながら述べている。ヒンティッカによると、ムーア文の話者は、自分が論理的に信じられないことを言う点で奇妙なのである。つまり、ムーアのパラドクスは整合性の問題ということになる。ただし、彼（とブラック）の論証には、主張という概念は正直な主張という概念によって理解されるべきであるという必然的関係が使用されており、この点には注意が必要であるように思われる。詳しくは『認識と信念』pp. 114-115 を参照のこと。

をもつものであると考える。以上の理由から、ムーアによるパラドクスの説明には議論の余地があるように思われる。

参考文献

Baldwin, T. 1990, *G. E. Moore*, Routledge, London.

Green, M. and Williams, J. N. (ed.) 2008, *Moore's Paradox*: *New Esseys on Belief, Rationality*, *and the First Person*, Oxford University Press.

Hintikka, J. 1962, *Knowledge and Belief*: *An Introduction to the Logic of the Two Notions*, Cornell, NY: Cornell University Press.（永井成男・内田種臣訳,『認識と信念』,紀伊国屋書店,1975 年）

Marcom, N. 1958, *A Memoir*, Oxford University Press.（藤本隆志訳,『放浪　回想のヴィトゲンシュタイン』,法政大学出版局,1971 年）

Moore, G. E. 1902, *Principia Ethica*, Cambridge: Cambridge University Press. (深谷昭三訳,『倫理学原理』,三和書房, 1977 年)

_____1912, *Ethics*, London: Williams & Norgate. (深谷昭三訳,『倫理学』, 法政大学出版局, 1977 年)

_____1942, "A Reply to My Critics," in *The Philosophy of G. E. Moore (The Library of living philosopher*; *v.4)* edited by Paul Arthur Schilpp, Northwestren University.

_____ 1944, "Russell's "Theory of Descriptions"," in *Philosophical Papers*, London, 1959.

Wittgenstein, L. 1953, *Philosophiche Untersuchungen*, Basil Blackwell.(藤本隆史訳：『ウィトゲンシュタイン全集８　哲学探究』,大修館書店,1976 年)

（かわぐち　かなこ／千葉大学大学院自然科学研究科　博士後期課程
・東邦大学非常勤講師）